

**【図書紹介】『ジャコメッティ 彫刻と絵画』デイ  
ヴィッド・シルヴェスター著 武田昭彦訳 みすず  
書房 二〇一八年**

著者	古屋 俊彦
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	16
ページ	90-90
発行年	2020-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00023078">http://hdl.handle.net/10114/00023078</a>

【図書紹介】

『ジャコモメッティ 彫刻と絵画』

デイヴィッド・シルヴェスター 著 武田昭彦訳 みすず書房  
二〇一八年

古屋 俊彦

イギリスの美術評論家であるデイヴィッド・シルヴェスターは、ジャコモメッティの存命中から没後に至る長期間にわたって書いた文章を集め、一九九四年にこの本を出版した。訳者の武田昭彦は、ジャコモメッティに関する文献研究でシルヴェスターによるジャコモメッティのインタヴューを知り、師匠の矢内原伊作がそのインタヴューに強くこだわっていたのが印象深かったという。矢内原伊作はジャコモメッティの作品のモデルを五六年から六一年まではほぼ毎業務めており、その間の六〇年夏にシルヴェスターもジャコモメッティのモデルを務めていた。シルヴェスターが昼間の数時間に絵画のモデルとなりジャコモメッティと執拗に議論を続け、夜になると矢内原伊作が彫刻のモデルとなりジャコモメッティはそこでは集中して仕事ができたとという。このような訳者と矢内原伊作と著者とジャコモメッティの四者の関係が、この訳書の成立の土台となっている。

この本は、ジャコモメッティの存命中に書かれた五篇、没

後に仕上げられた五篇、八〇年代に書かれた一篇、六四年に行われたインタヴューで構成されている。前半の五篇の論文では、まずは作品を視覚効果の側から紹介し、探求の内実に次第に入っていく。モデルを務めた時に遭遇した描いては消しての繰り返しから探求の軌跡を読み取り、インタヴューに基づいて似ている物の探求を作品を通して改めて説明しようとする。後半の五篇の論文では、シュールレアリスム期の作品分析から改めてジャコモメッティの実験の軌跡を確認する。更に幼少期から個人的に続けられ後に実物写生の仕事に至る探求の道筋を追う。モデルを務めた出来事を振り返り、終わらない探求過程を解釈し直す。出生時から生涯を通しての困難で不可能な探求者としてのジャコモメッティを描き出し、残された作品の有り様を再び見極めようとする。最後の論文では、時間において別の観点から、激しい探求の現場には距離を置き、探求の成果がいかに作品の完成度に配分されているかを再評価する。インタヴューでは、ジャコモメッティ本人に、制作を通して到達した異質な知覚の様相や、失敗と分っていないながら続けた実験、本当に似ている物を作り上げた芸術家などについて、存分に語らせている。同時期にモデルを務めたジャン・ジュネや矢内原伊作と同じくらい重要な相手でなければ聞き出せないような率直な告白である。